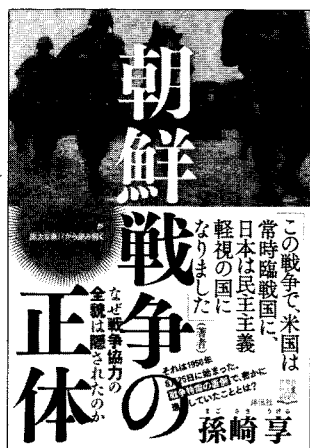


『朝鮮戦争の正体』
孫崎享=著
祥伝社 1600円+税
ISBN978-4-396-61731-8



キム・ジョンギョクが

著者に聞く

孫崎 享



まごさき うける／1943年生まれ。66年、東京大学法学部を中退し、外務省に入省。英国、ソ連、米国、イラク、カナダ駐在を経て、情報調査局分析課長、駐ウズベキスタン大使、国際情報局長、駐イラン大使を歴任。2002年から09年まで防衛大学校教授。ツイッター (@mago_saki_ukeru) のフォロワーは約14万人。ニコニコ動画も発信中。『戦後史の正体』(創元社)、『日米開戦の正体』(祥伝社)ほか著書多数。(撮影／秋山晴康)

朝鮮戦争で日本は民主主義をやめた

みなな蹴飛ばした上での解雇で、日本の自由主義が崩れていきました。憲法では、思想の自由、表現の自由が保障されています。しかし、共産党員に同調する疑いがあるというだけでクビを切られている。これは、民主主義下ではあつてはならないことです。レッドパージによる新聞社員に対する解雇を不当として訴えた当時の訴訟記録を見ると、日本国憲法よりも占領軍の指令のほうが優先するという判例が出ています。日本の国内において、米国の指令が、日本国を守ることも重要であるという政治意識。それが政治家や官僚、それからマスコミの中でも形成され、日本の今の政治のゆがみにつながっていると感じます。

今回の著書では、日本をはじめ、朝鮮戦争による米国や中国、韓国、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)、ソ連(現・ロシア)などへの影響について検証しています。

聞き手／秋山晴康(編集部)

朝鮮戦争勃発70年を機に『朝鮮戦争の正体』が発刊された。著者で、元外務省国際情報局長の孫崎享さんに、本を書かれた理由や背景、今後の課題などについて話を聞いた。

——孫崎さんは『朝鮮戦争70年』

も同時期に共著で上梓されています。朝鮮戦争の学術的研究は進んでいるようですが、国内では一般に、特需で日本が経済成長したという認識しかないのではないのでしょうか。ですので日本との関わり、特に朝鮮戦争が日本に与えた影響を分析されている部分は興味深かったです。

明確になったのは、第2次

世界大戦直後の憲法に代表される、日本の戦後の新しい体制が、実は朝鮮戦争でひっくり返されたという事実です。

日本国憲法では「国権の最高機関を国会とする。国民主権を実現するための政治の仕組みが国会である」とされています。朝鮮戦争が起こると同時に、後に自衛隊となる警察予備隊がつくられます。朝鮮戦争に連れて行かれるという恐れがある中で警察予備隊を創設するのには、国会を通すと大荒れになってしまいます。このため、国会を通さずに、法律ではなく内閣が制定する政令でつくってしまいました。国会が国民主権を実現する民主主義の大原則をやめてしまったということにつながります。

それから、あまり知られていないのは、約12000人の海上保安庁に所属する旧海軍軍人が掃海(機雷を一掃して

安全にすること)に従事したという事実です。日本は単に朝鮮戦争の物資を運ぶ基地になっただけではなく、日本自体が戦争に参加したことが明確になりました。

——著書では、レッドパージ

について注目されています。朝鮮戦争に日本の警察予備隊が関与するとすると、マスコミが書く可能性が高い。それでマスコミの人員を「レッドパージ」という名のもとに大量に解雇してしまいました。報道や言論の自由など、